

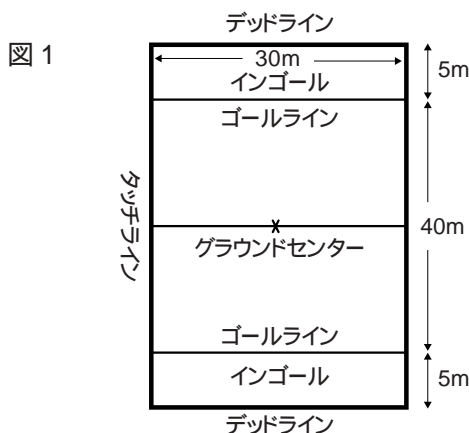
タグ・ラグビーの競技規則

普及育成委員会では、平成16年度普及育成委員会事業として、平成20年に予想される小学校学習指導要領改定時にタグ・ラグビーの教科として正式採用されることを目指し活動に入った。期間は5年。全国小学生タグ・ラグビー選手権大会の開催等で一般的に大きくタグ・ラグビーを認知されるに至ったが、本則への記載がなく、ラグビー関係者よりの問い合わせに対する答えと、次年度より入る最終活動のロビー活動をより確実に成果を挙げることに主眼を置いて本則への記載を決定した。

(普及育成委員長 武田守久)

タグ・ラグビーのグラウンドサイズは横30m × 縦40m (ゴールラインからゴールライン) インゴール (ゴールラインからデッドライン) は各5m ずつとする。

1 チームは競技グラウンド内にいる5名のプレーヤーと入替可能な2名以上5名以下のプレーヤーにより構成される。



競技規則

第1条 試合開始時に双方のチーム代表プレーヤーがトスをし。勝った方が試合開始のフリーパス、またはサイドのどちらかを選ぶ。

前半7分 - ハーフタイム1分 - 後半7分とし、前半と後半でコートチェンジを行う。

後半開始のフリーパスは前半のフリーパスでない方のチームが行う。

第2条 フリーパスとはボールを持ったプレーヤーがその位置から動かずに、自分より後方のプレーヤーにパスをすることである。

その時相手チームは必ず5m下がらなくてはならない。

【補 足】

- (1) 試合開始・得点後の再開・反則やタグ4回等による攻守の交替時のゲームの再開は、フリーパスによって行う。
- (2) フリーパスは、必ず、レフリーの指示の後に行われ、クイック・スタートは認められない。レフリーは、守るチームのプレーヤーが5m以上下がっていることを確認した後に、フリーパスを行う指示を出す。
- (3) ゲームの再開の場所が、ゴールラインから5m以内、または、インゴールとなる場合、その地点からタッチラインに平行したゴールラインから5mの地点でフリーパスを行う。

第3条 試合開始はグラウンドセンターからのフリーパスにて行う。

トライ後の再開はグラウンドセンターからトライをとられたチームのフリーパスにて行う。

第4条 ボールを持ったプレーヤーは前後左右どの方向にも自由に動くことができる。

第5条 守るチームのプレーヤーは相手チームのボールを持つプレーヤーのタグを取ることができる。

第6条 タグを2本ともつけたプレーヤーだけがプレーに参加でき、またトライをすることができる。2本のタグをつけていないプレーヤーがボールを持った場合は反則とし、その地点から相手のフリーパスでゲームを再開する。トライ直前にタグをとられたプレーヤーがそのままインゴールに入ってトライしても、トライは認められない。ゴールラインから5m地点までもどって、フリーパスでゲームを再開する。

【補 足】

- (1) 『タグを2本ともつけた』とは、タグをからだの両サイド（タグをつける位置は、からだの真横）につけていることを意味する。
- (2) からだの片側に2本つけている状態や1本しかついていない状態ではプレーに参加することはできない。このような（タグを正当につけていない）プレーヤーが
ボールを保持しているチームの場合
ボールをプレーした場合（ボールを持って走っている間にタグが落ちた場合を含む）は、それまでボールを保持していなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。
守るチームの場合
タグを取った場合は、それまでボールを保持していた側のフリーパスでゲームを再開する。（タグの回数は“0回”に戻る）
- (3) 相手からタグが見えやすいようにするため、上着がベルト位置より長い場合は、上着の上にタグベルトをつけるか、上着をパンツの中に入れるようにする。

タグの正しいつけ方と正しくないつけ方の例

図2 両サイド(真横)に1本ずつ



図3 2本とも片側についている



図4 1本しかついていない



図5 上着はできるだけ
パンツの中に入れる



図6 上着を入れずにタグを
つけるとタグが取りにくい。
また、取られた後につける
際にも上着がじゃまになる

× 緑と緑

○ 緑と赤

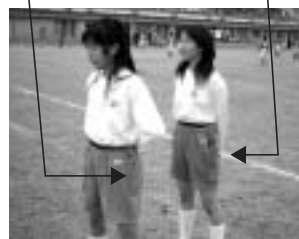


図7 タグをわかりやすくするため
パンツ等との同系色は避ける
× 左は緑と緑
右は緑と赤

第7条 得点は、ボールを持っているプレーヤーが相手インゴールにボールを置くことによって得られる。ゴールラインはインゴールであり、タッチインゴールライン及びデッドラインはタッチである。トライは立ったままで行われなければならない。その際、両足はインゴール内に入っていないなければならない。片足または両足がインゴールに入っていない状態でのトライは認められず、ゴールラインから5m地

点までもどって、それまでボールを保持していた側のフリーパスでゲームを再開する。

【補 足】

- (1) トライをするためには下記のことが条件となる。
 - ・両足がインゴール、または、ゴールライン上にある
 - ・タグを2本ともつけている
 - ・不当に頭を下げた姿勢（飛び込むような姿勢）ではない
- (2) インゴールに入った後（トライをするまでの間）にタグを取られた場合、トライは認められない。
- (3) トライをするために地面に向かって飛び込む行為は禁止する。この反則があった場合は、ゴールラインから5mの地点でそれまでボールを保持していなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。
- (4) ボールを持ったプレイヤーがタグを取られた後にインゴールに入った場合やインゴールに入った後にタグを取られた場合、ゴールラインから5m地点でそれまでボールを保持していたチームのフリーパスでゲームを再開する。
(それまでのタグの回数は継続する)
- (5) 両足がきちんとインゴールにない状態でトライの動作をしてしまった場合、反則ではなく、ボールがプレーできなくなったものとして、ゴールラインから5m地点でそれまでボールを保持していたチームのフリーパス（タグの回数は継続）でゲームを再開する。

第8条 タグを取ったプレイヤーは、タグを相手に手渡しで返すまでプレーすることはできない。

また、タグを取られたプレイヤーは取られたタグを返してもらい腰に付けるまでプレーすることができない。

図8 タグを返す



第9条 ボールを持ったプレイヤーは、タグを取られないように手で押さえたり、体を一回転以上させることはできない。

【補 足】

からだを一回転以上回転（くるくる回る）させてタグを取られないようにすることは禁止する。

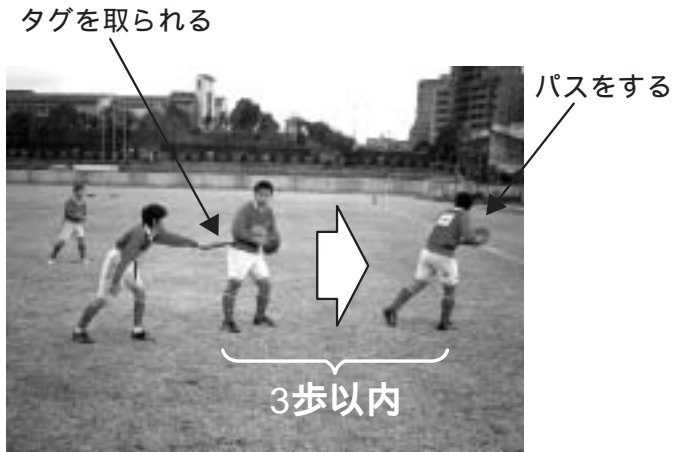
第10条 タグを取られたらただちに前進をやめ、ボールを離さなくてはならない。めやすは3歩以内だが、すぐに前進をやめられたのに故意に前進を続けたとレフリーが判断した場合は、たとえそれが3歩以内であったとしても反則とする。

【補 足】

- (1) この反則の名称をオーバーステップとする。
- (2) 『3歩以内』というのは、『3歩進む権利がある』という意味ではなく、「走っていて止まるのに3歩程度必要」という考え方の上のものであり、故意に進もうとするプレイヤーに対しては反則を適用する。
- (3) タグを取られて『3歩以内』に下記のいずれかが起きた場合は、その地点からそれまでボールと保持していなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。
タッチラインに触れる、または、タッチの外に出る
タッチインゴールラインかデッドラインに触れる、ま

たは、それらの外に出る
 ボールを前に落とす、または、前に投げる
 その他の反則をする

図9
 タグを取られたら
 3歩以内にパス



第11条 試合中、相手プレイヤーと体がぶつかるプレーをすることはできない。

具体的には、タグを取りに来た手を払うこと、手で相手を突くこと、相手を捕まえること、体当たりすることなどであり、手を広げてのディフェンスも禁止とする。また、タグを取りに行く際に、自分からは遠い側のタグを故意に取りに行くことにより、相手プレイヤーの前進を妨害し接触を誘発するタグの取り方も禁止する。



図10
 タグを取りに来たプレイヤーの
 手を払いのける
 (特に走っているときの内側の手が
 当たってしまい、結果として相手を
 妨害することがある)

【補 足】

- (1) ボールを保持しているチームのプレーヤーが、守るチームのプレーヤーがいるところに当たりに行くことをオフェンス・チャージと呼び、守るチームがボールを持ったプレーヤーの進路を故意にふさぎに行くことをディフェンス・チャージと呼ぶ。おのおの故意に当たりに行くことは危険なプレーとして反則を適用する。
- (2) ボールを持ったプレーヤーのからだの遠い側のタグを取りに行く、また、両サイドのタグを同時に取りに行く事は、ボールを持ったプレーヤーに対する前進の妨害として反則を適用する。



図11
遠い方のタグを取りに行く



図12
手を広げてディフェンスをする

- (3) これらの反則が起きた場合、反則を起こさなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。

第12条 一切のキックは禁止し、地面に転がったボールもかがむなどして立ったまま手で拾わなくてはならない。

第13条 ボールは自分より前に投げることはできないが、真横へ投げることはできる。

自分より前に投げた場合はスローフォワードとし、パスを受け損なって前に落とした場合も前に投げたとみなしノックオンとする。スローフォワードやノックオンが起こって

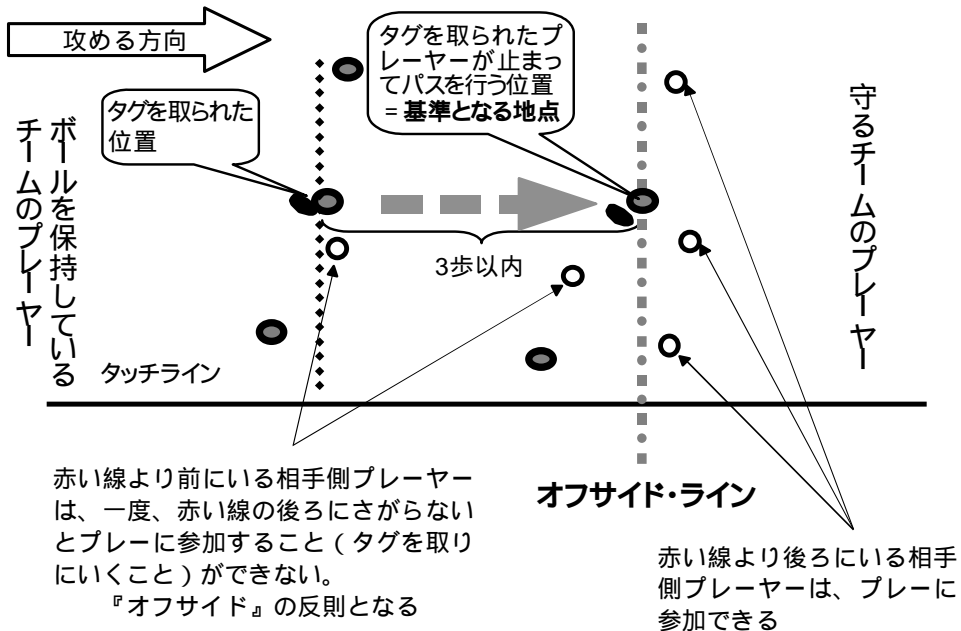
も、そのボールを相手が拾うなどした場合は、アドバンテージを適用して反則をとらないこともある。

【補 足】

アドバンテージはスローフォワードやノックオン以外の反則に対しても適用される。

第14条 タグを取られたプレイヤーの地点を基準として、守るチームはその地点より相手側でプレーすることはできない。

図13 タグを取られた後の再開の地点（基準となる地点）



【補 足】

- (1) この地点は、タグを取られた地点ではなく、第10条で述べた『3歩以内』のボールを離す位置となる。
- (2) ボールを持ったプレイヤーがタグを取られても、それまでにタグを取られた回数が4回未満の場合はただちにパスをすることによりプレーをすることができるが、その

場合、守るチームのプレイヤーは、タグを取られたプレイヤーの地点を基準にゴールラインに並行した線より下がらなくてはならない。下がらない場合はオフサイドとなる。ただし、プレーがただちに行われたため、基準となる地点より下がりがきれないプレイヤーは、一旦、基準となる地点に下がるまでプレーに参加しなければ（またはプレーの邪魔にならなければ）、レフリーはアドバンテージを適用して反則を取らないこともある。

- (3) 図 14.15 のどちらの場合も『オフサイド』となり、『基準となる地点』からそれまでボールを保持していた側のフリーパスでゲームを再開する。（タグの回数は“0回”に戻る）



図 14

- ・白い破線が『基準となる地点』に平行する線
- ・真ん中のプレイヤー（相手側）が、パスの前に線を越え、パスをすることを妨げている、または、インターセプトをしようとしている



図 15

- ・白い破線が『基準となる地点』に平行する線
- ・左のプレイヤー（相手側）が、一度、線の後ろに下がらずにパスを受けたプレイヤーのタグを取りに行っている

第15条 フリーパスからの最初のパスをもらうプレイヤーはパスをする選手から2m以内にいななくてはならない。走りながらパスをもらう場合はそのスタートする地点を2m以内とする。

第16条 上記第8条～第15条の禁止事項は反則となり、その地点から相手ボールのフリーパスとなるが、反則をした

チーム側のゴールラインから 5 m 以内の反則の場合は 5 m 地点でのフリーパスとなる。

第 17 条 タグを 4 回取られると最後にタグを取られた地点から相手ボールのフリーパスとなる。

第 18 条 タッチライン上はグラウンドの外でありそれはインゴールにおいても同様である。

ボールを持ったプレーヤーがタッチラインを踏んだ場合やタッチラインから出た場合、またボールがタッチラインに触れた場合やタッチラインから出た場合はその地点のタッチラインの外から、その時点でボールを持っていたチームの相手チーム、もしくは最後にボールに触れたチームの相手チームのフリーパスとなる。タッチラインの外からのフリーパスはタッチライン上の地点より直角もしくは後方へのパスとする。ゴールラインから 5 m 以内でタッチラインから出た場合は、次のフリーパスはゴールラインから 5 m のタッチライン上から行う。

【補 足】

ボールが地面に転がるなどして、ボールがタッチになる前にどちらのチームのプレーヤーが最後にボールに触れたか疑わしい場合は、『攻撃側』のフリーパスでゲームを再開する。この場合、どちらのチームがフリーパスを行う場合でも、タグの回数は“ 0 回 ”になる。

攻撃側 = その地点が自陣側にあるチームの相手側のチーム（地域的に進んでいる側のチーム）